
詩と少女

黒戯楼雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩と少女

【Nコード】

N3954B

【作者名】

黒戯楼雅

【あらすじ】

詩の好きな悠樹ゆうきは登校中に怪しげな建物があることに気づく中に入るとそこには部屋いっぱい詩集と本がずらりと並んでいた。悠樹はそこで、この建物の主という男に出会ったそしてこの建物について話を聞いた悠樹は…

一つ：名前が…

私の名前は神村悠樹、かみむら ゆうき

一応女子高生です。

名前からしてよく男子に間違われます・・・母は男の子が欲しかったらしくて

私が生まれる前にこの悠樹という名前を付けたらしいです・・・ホント、いい迷惑

だなあって思います・・・

「悠樹ー、早く起きなさい！！ 学校に遅れるでしょー！！」

「はい・・・分かったよ・・・」

そうして私の一日は始まる

二つ：怪しい建物と青年さん

相変わらずな毎日・・・今日はちょっとだけ違うけど・・・

「もう・・・30分も早く出てきちゃった・・・どうするのよ・・・もう・・・」

そうぶつぶつ呟きながら歩いてると、怪しげな建物があることに気づいた

「？ なに？ ここ・・・」

怪しそうだが少しだけの好奇心がある・・・私はその好奇心に負けてしまった

そして中にはいることにした。

「・・・失礼しまーす・・・誰かいませんかー・・・」

ドアを開け、中に入って誰かいないかを大声で確認した。

しかし誰も来る気配がないので、私はずかずかと中に入ることにした・・・

「・・・うわぁ・・・凄い本の山・・・」

壁という壁の本棚を埋め尽くさん限りに本がずらりと並んでいる
入りきらないだけなのか分からないが地面にも本が積み重ねられていたり

散乱していた。

その散乱していた本に埋もれていた本を手に取りうとしたときに
どこからか男の人に話を掛けられた。

「・・・俺の館に何用だ？」

私よりも二、三歳年上に見えるその男性はきつい眼光を私に向け私を問う、

「あ、あの・・・勝手に入ってすみません・・・」

「何用だと聞いている、答えろ」

「特に用は無かったんです・・・ちょっとだけ気になったので入ったんです・・・」

勝手に入ってしまったてすみません……」

「……今回の導き手はお前か……名はなんと云う」

「へ？導き手ってどういふんですか？」

男性がなにを言ってるかが分かってない私は少しおろおろして男性の動きを伺う、

「名はなんと言っ、何度も同じことを言わせるな」

「はっ、はい！　．．．私の名前は神村悠樹といいます」

「ユウキ、……ユウキというのだな？」

「はい……そうですね、何か？」

「いいや……何でも無い……俺の名は十林安須巳と言う」

「え！！ 女の人なんですか！！」

私はびっくりして男性を見た。しかし男性は呆れた態度で私を見る

「……名前が女っぽいだけだ、気にするな」

「あ……すみません……」

「ユウキ、お前は導き手となって俺と一緒に行動してもらおう」

[illegible]

—:—:—

三つ：歪み

「あ、あの！！導き手ってどういうことなんですか？」

「・・・ちつ・・・屋気楼しやきろうと言う現象がこの世にはある
それは分かるか？」

「すごく暑いと見えるあれですか？」

「殆どそれに近い現象のことを俺は言っている、俺はそれのことを
歪みといっている・・・歪みは人の心を変化させ、良くない方へ
と進ませる

力がある、その力がもしも爆発的に増えたら俺がやっていた事が
全て台無しになる。

それを防ぐためにも導き手、お前の力が必要なんだ」

「だから、私が言ってるのはその導き手と言うのはどういうのをす
ればいいのかを

聞いてるんです。第一私は何の取り柄もないし、好きなものも・
・好きなものは

ポエムや詩だけど・・・」

「ユウキは詩を作るか？」

安須巳さんは私の目を見て問う、私は頭を縦に振り、

「詩以外のものなんてかけないんですけどねえー」などと言った。

「詩が書けるのか、十分素質があるぞ、なんせ俺が歪みを体験した
人間の

後始末をしないとイケないから・・・お前はその歪みを見て感
じた思いを

ただ詩にしてくれればいいんだ」

「それだけでいいんですか？」

私は不思議そうな顔で安須巳さんを見る。

安須巳さんは冷たい目で私を見、話をかけてくる

「そしたらお前はまず学校に行け、時間が無いぞ」

「えっ！！・・・やばいつ！！」

私は腕時計を見て少しだけ絶望する。

あと5分で遅刻とみなされる時間になるからだ

「下校時間になったら迎えに行く、校門の前で待っている」

「はっ・・・はい！、行つて来ます！！」

そういつて私はこの建物を後にした。

四つ：忘れてた！！

ぎりぎりセーフで学校に着き、ほっと一息したかったが

そうもいかず・・・日直の仕事があったりで今日一日は早く過ぎて行った

あいにく今回の掃除当番でもあるためすぐには帰れないらしい・・・

「神村ー早く掃除するぞー」

「あ・・・分かってるー、ちよつと持つてて」

そういつて私は日誌を早々と書き上げ箒を手に取り、掃き掃除をすることにした・・・5分後女子がなにやらグラウンドの方を見てキヤーキヤー叫んでいる

「んー・・・どしたの？」

「あそこ見て・・・イケメンいるのわかる？」

指を指した方向を私は凝視して驚く、安須巳が神経質そうな顔でこちらを睨んでいた

「げ！！・・・あ！！」

いまさら思い出しても遅いような気がするのは私だけだろうか・・・確かにあの時、迎えに来るとは言われたが・・・本当に来るとは・・・などとも

思いながら男子に後を任せることにしようとした・・・が・・・

「逃げるのか？神村、」

「ちっ・・・違う・・・これには深い訳があつて・・・」

「逃げるのは反則だぞ・・・」

「お願い！安須巳さんを待たせてるの・・・今日迎えに行くって言われてたのすっかり忘れてたからさ・・・明日何か奢るからそれで勘弁して！」

「・・・しょうがねーな・・・わかった・・・明日必ず奢れよな・・・早くいけつて」

「うん、必ず・・・ありがとう」

そういつて私は教室を後にした。

急いで階段を駆け下り、下駄箱に向かう、鞆を脇に抱え、上履きを外靴に

取り替える、そして外へ走り出した。

「遅れてごめんなさい！」

私は安須巳さんの顔色を伺いながら謝る。すると安須巳さんは少し神経質そうな顔で私を見て、何かあったのなら仕方がないな、といってくれた

「いくぞ、歪みがこちらに近づいてきている・・・ここで仕留めるのは流石にあれだ・・・」

兎に角ついて来い」

「はっはい！！」

そして私は安須巳さんの後をついていく事になった。

五つ：初仕事お！！！！

安須巳さんの後をついていくと、商店街の道のと真ん中で安須巳さんは歩みを止めた。

「ここで歪みが起こる」

「え？ さっき歪みがこつちに来るって・・・」

「ああ、確かに俺はあの時そう言った・・・まあ見ている・・・」
私は彼を見て商店街を見渡す。

すると、ある気弱そうな男の子が何かを思い出したかのように書店へ入っていったのを見た安須巳さんは

その少年の後を追うように書店の中へと入っていった

私は後を追いかけるようにして書店の中に入ろうとした瞬間、空気が微かに変わるのを感じた

「あつ・・・あの・・・ここ・・・さっきの感じと違うような気がするんですけど・・・」

「そこまで分かるなら良い線いつてるな」

安須巳さんは入る前に振り向きそう呟いて入っていった。

「あつ・・・まっってくださいっ！！」

書店の中はずっしりと重い空気が漂っている。

「・・・ここ本当に本屋さんなんですか・・・」

「歪みが侵食してるな・・・下手したら・・・間に合わないかもしれないな・・・」

「？」

安須巳さんはあの少年を探して歩き回る。私はその後を付いて歩き書店にいる人の顔色を伺った、しかし全ての人が動いてない、

「！！！！」

「そう驚くな、歪みのせいだ、歪みの力さえなくなればこいつらもすぐ直る」

そういつて少年を見つけると、静かに近づき耳元で呟く

「・・・汝意識と反する行動を犯す無かれ

絶望への近道は汝のすぐ傍にあり

引き返せ、そして汝の犯した罪を

誠意として償いたまえ・・・・・・・・」

低い声が小さくこちらまで聞こえてきた、官能的なその声は

少年の耳へと届き、少年を身震いさせた

「なにをしたんですか？」

「詩だ・・・」

「へ？」

「・・・お前はあの歪みを見てどう思った？」

「・・・なにをしたかが分かりません・・・彼はなにをしたんですか？」

「盗みを働いた、筆記用具などをな・・・一応記憶の修正をしている」

「・・・可哀想だと思います・・・」

私はつらづらとゆっくり話し始める

「なぜだ？」

「・・・分かりません・・・ただなんとなく可哀想だなんて・・・」

「詩にしてみる」

「はっ？」

「詩にしてみると言っただ」

いきなり言われたこの言葉を私は把握する事ができなかった、けれど口が勝手に言葉を紡ぐ・・・操り人形にでもなったかのよう

に・・・少年の心は曇っていた

だから心があのように歪んでしまった

なにが足りなかったのだろう

愛情が足りなかったのか？

いいや、思いやりの心が足りなかったのだろう

ゆっくりお休み・・・私が守るから

私の言霊が貴方を守るから

ゆっくりお休み・・・そして・・・

おつかれさま・・・」

「・・・・・・・・あれ・・・・・・・・僕なにしてたんだろ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・早くその鞆のものを戻しにいけ・・・」

「え・・・・・・・・あ・・・・・・・・すみません!!!」

「早く戻しにいけ・・・・・・・・ばれてはいない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ありがとうございます・・・・・・・・」

すると少年は頭を深く下げて鞆から盗んだものを戻しにいった・・・先ほどまで重かった空気が今はそれが嘘だったかのように通常のものに変わっていた。

「これが歪みとの差だ・・・これほど違うんだ・・・」

安須巳さんは書店を出て少ししてから私に話しかける

「・・・・・・・・こんなに違うんですね・・・歪みとの差がこんなにあるなんて・・・・・・・・」

私は下を見ながら歩く、少しだけ涙が出てきていた。

「・・・・・・・・泣くな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ふえ・・・・・・・・ふえーん!!!」

「・・・・・・・・いくぞ・・・・・・・・」

「ひくっ・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

そういつて安須巳さんと私はあの建物へと戻る事にした。

六つ：翌日・・・

そして安須巳さんの建物に戻ってきた私が始めに手渡されたのは何にも書いてない真っ白なノートだった。

「あの・・・これになにを書くんですか？」

「さっきのあの詩を思い出して書いてくれ」

奥の部屋でそのノートを受け取ってペンは貸してもらった。本がいっぱいある部屋とは真逆で生活に最低限必要な物しか揃っていない、

接待用のソファとテーブル、あとベッドとクローゼット、

キッチンやバスルームは見えないが多分何処かにあるのだろう、などと思いながら、辺りを見回している私に気づいたらしく

座ったかどうか？というのでとりあえず座り、ノートを開く、そしてある事が頭をよぎった。

「あの・・・よく覚えてないんですけど・・・」

「そうか・・・書け」

「あの・・・だから覚えてませんって」

「とりあえず書け」

「覚えてないんです」

「・・・なんで覚えてないんだ・・・」

ため息交じりの口調で言われる、多分、というか絶対というか・・・

まあ厭きれているというのはなんとなく分かる

「兎に角書け」

「思い出せません」

「・・・なんで思い出せないんだ・・・」

「私に聞かれても困りますよ」

「お前が悪いだろう・・・」

「だって・・・あの時はいきなり頭がボーっとして、いきなり

何かを言っただんです・・・それが思い出せないんですよ・・・」

「・・・書けないのか？・・・」

「思い出せないだけなんです、思い出したら書けますけど・・・」
そう言っただけで私の頭に何か重みを感じる。

「？」

「・・・分かった・・・持って帰って構わない・・・必ずこのノートに

書いて持って来いよ」

そう言っただけで安須巳さんは私の頭の手をどかしてくれた。

「帰っていい、もう時間があれだろう」

「・・・あ・・・もうこんな時間・・・」

腕時計を見ると、もう夜の8時を回っていた。

早く帰らないと流石の両親も心配するだろう

「家まで送る、」

「え？ いいですよ」

「遠慮するな、それにお前の家を把握してる方がいい」

そう言っただけでスタスタと外へと歩みを向ける安須巳さんの後を

ついていく羽目になった。

最終的に家まで送ってもらいその後は家に帰って

言い訳を考えた。

母さんの声がまだ耳に残ってる・・・はあ・・・

ご飯を食べてお風呂に入って、自分の部屋に戻って宿題をして・・・

寝ようと思ってベッドの中に入った時、ふとあのノートの事が気になっ

った。

私はベッドから出て、鞆の中に入ってるノートを取り出す

本のような外見、しかし中には何も書かれていない真っ白な頁

いくらかめくろくと、出てくるのは白い頁のみ、

（何で白いんだろう・・・なんで何にも書かれてないの？）

片手で持つとずっしりと来る重さ、この重さは何を表してるのだろう

一冊分の重さではない、とても重いこのノートを
私が埋めなくてはならないのだろうか
何で私が………

翌日、眠れてないまま学校に登校する事になった。

眠れていないのに隈ができないという不思議な体を持っている私は
体のだるさを軽く感じながら学校へと入っていった

すると複数（結構な数）の女子が群がってきて安須巳さんのところに
ついて

質問攻めにあってしまった。

「悠樹！！！！ 昨日のあの人って誰なの！！！」

「え？ あの人って誰？」

「それはこつちが聞きたいわ！！！」

（まさか………安須巳さんのこと？）

私は嫌な汗をかいてるのに気づくと私は女子の間を掻き分けて自分の
教室へと走った。

「だ……誰か……助けてえ！！！」

すると教室にいる男子諸君は私から一斉に目を背けた

「なんで無視するの！？ 上沢」

「！！！！……なんだよ……」

「何でみんな無視すんのおおお……」

「………女の恨みを買わないようにするため………」

怯えた表情の上沢を恨めしく睨んで私は女子の質問攻めにあうことにな
ってしまった………

「………どうした？………そんなにやつれて……」

「はは………なんでもないです……」

「………兎に角行くぞ………今日はもつと遠いから……」

「はっ・・・はい！」

7つ：亞伊香と鴉

「・・・間に合わなかったか・・・」

「え？」

空気が変わった。

ああ・・・何かが違う・・・

何が違うの？

「・・・行くぞ・・・もう間に合わん・・・」

「どういうことですか？」

「・・・歪み・・・」

「へ？」

「歪みが進みすぎた・・・もう間に合わん・・・」

いびきを返して歩く安須巳さんの前に立って理由を聞く

「間に合わないんじゃないやなくて間に合わせるんです！！！」

私はなぜか安須巳さんを叱声していた。

「亞伊香、」
あいか

「ん・・・なに？鴉」
からす

鴉が私を見てにやりと禍々しく微笑む、

なんとなく分かるが私は鴉に聞いた

「何かあったの？」

「歪み・・・けど間にあわねーな・・・つまらん・・・お？」

つまらなさそうな顔が一気に輝く、・・・嫌な予感が

脳裏を掠めたのは偶然だろうか？

「・・・なに、その、お？ って」

鴉は嗤う、意味を聞いてもいつも答えてくれない鴉は
意地悪で幼げな笑顔しか浮かべない

「知り合いがいるけど・・・ふふ・・・行くぞ、亜伊香」

「知り合いって誰？」

「付いて来い、そしたら分かる」

「・・・分かった・・・」

鴉は何も無いハズの場所に溶け込んでしまった、

簡単に言うത്とワープ、鴉は次元を操って自分の好きなところにいける特殊な能力を持っている。

私にはそんな能力は無いけど・・・

「ほら、行くぞ」

「ん、分かつてる」

そういつて鴉の言うがままに私は従わなければならない・・・

「・・・そしたらお前は警察にでも捕まりたいのか？」

「は？ 何が言いたいんですか？」

安須巳さんは意味の分からない事を言う、いや、意味は分かるしかし何で警察に捕まるのが不明なのだ

「そのままの意味だ・・・行くぞ」

ぶっきらぼうに言って私の腕をつかみ凄い力で引っ張って行く

「ちよっ・・・痛いです！！！」

私が叫んでも安須巳さんは手を離さない、そして不思議な事が起こった

安須巳さんの姿が消えてしまったのだ、

しかし消えても私を引っ張ってる力は緩まない

私はその場で踏ん張って引きずられないようにしたが

力は弱まらず、安須巳さんが消えたほうへと私も消えていった・・・

着いた場所は安須巳さんの家、しかしそこには見た事のない

女の子と男の子が立っていた。

「・・・鴉・・・」
「ん？お久しぶり〜アズ〜ww」

薄暗い建物の中に立っている私と鴉は何を待っているのだろう、
鴉の能力でここまで飛ばされたけど・・・

「・・・鴉・・・」

見知らぬ男が話す

「ん？お久しぶり〜アズ〜ww」

鴉は微少なながらも殺気を放っている

「・・・誰なの？鴉」

「俺と同類の人間、」

「お前と一緒にされたくない」

「んなつれない事言うなよなー」

「・・・」

「んで・・・あの子がお前の導き手なん？」

相変わらずな鴉を見て私は少しだけため息を吐いた

2、3年パートナーとして一緒にいるが未だに

理解しがたい人間だ

「その子の名前、なんて言うの？」

「教えるか、どうせ何かするに違いないんだからな」

しん、と静まるその空間で男たちが会話する

（あの子が・・・導き手？・・・嘘でしょ）

私はそう心の中で呟き同い年あたりの少女を見る

なぜかうつろな目をしていたそして何かを呟いていた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3954b/>

詩と少女

2010年10月11日11時23分発行